審判員派遣報告書

1	事業名	Softbank ウインターカップ2018 第71回全国高等学校バスケットボール選手権大会	2	日　程	2018年12月24・25日
3	報告者	長谷川　悠貴	4	派遣先	武蔵野森総合スポーツプラザ

5	大会概要　および　大会結果		
大会名称	Softbank ウインターカップ2018	大会期間	2018/12/24・25
大会内容			
男女50校ずつが出場するトーナメント形式の全国大会。			
高校3年生にとっては最後の全国大会でもあり注目度の高い大会である。			
今年度は東京体育館の改修工事の為、場所を移して開催された。			

6	担当したGame				
No	期日	対戦カード	R/U	相手審判	ゲ　ー　ム　雑　感
1	12月24日	美濃加茂 vs 能代工業	U1	CC 鈴木 氏（北海道） U2 山口 氏（長崎）	前半は拮抗した展開となったが、後半速いパス回しと走力でバスケットを展開した能代工業が抜け出し、勝利した。
2	12月25日	開志国際 vs 正智深谷	U1	CC 岩尾　氏（熊本） U2 山本 氏（山口）	開志国際が終始リードし勝利する展開となったが、外角のシュートで正智深谷も攻撃を続け、最後まで粘り強く戦った。

7　審判会議・ミーティング内容、審判技術・判定基準等に関すること、全体の感想および提言等

美濃加茂 vs 能代工業　主任：山田　功　氏

●プレゼンテーション

審判員としての立ち姿、振る舞いをもっと自分自身で作っていかなくてはならない。特にセンターの時の態勢が休んでいるようで判定への意識がないように見えるとご指摘をいただいた。映像等で自分の動きを研究してすぐにでも修正したい。

●メカニクス

ローテーションが起こった際にセンターからトレイルへの上りが遅いことが多かった。つかむべきプレイが落ち着いたらトレイルをつくることにも意識を向けて素早く対応できるようにしたい。

センターからゴール下のリバウンドやポストプレイへの目の当て方、立ち位置をもっと工夫してプレイが捉えられるようにしなくてはならない。プレゼンとも共通するが、センターで判定をしていくんだという意識をもっと持たなくてはならないと感じる。

●CCメンタリティについて

オフェンスリバウンドの際のショットクロックが誤って24秒にリセットされるケースがあった。トレイルのレフリーを確認し、リセットでゲームを進めたが、14秒リセットが正しかった。自分自身でも正しく確認し、訂正をしてゲームを再開するまでをできなくてはならない。CCメンタリティを持って、ゲームを自分が運営するんだという感覚を誰と組んでも持てるようにならないといけない。

また、ゲームを通してCCの鈴木さんの笛が多く、自分の笛が少なかった。同じ基準を共有して、ゲームを見られるかどうかも大切である。そうしたものについていけるような力も必要である。

開志国際 vs 正智深谷　主任：渡邊　整　氏

●留学生への対応

サイズ差が大きく留学生に対してのDFや留学生の動きをどう見るかという事が非常に重要なゲームであった。主に留学生のファウルを取りあげることが多かったが、もう少し確認が必要であったように感じる。また、サイズの差によってできることを想定して長くプレイを見る必要性があった。

●メカニクス

リングに向かうプレイに対して、センター、トレイルがもっと判定に関わらなければならない。特に横からくるヘルプなどはリードからは見えづらく、上からの判定が必要である。DFの遅れなどをよく見て判定しなくてはならない。全体に自分の動きが遅く、プレイに合わせられていない印象を映像で受けた。細かな動きをもっと素早くしてプレイにアジャストしていく動きを意識したい。

●レフリーディフェンス

全体を通して、もう少しれふれーディフェンスを意識した方がよいとお話をいただいた。ヘルプや留学生へのよせ方などディフェンスの動きをしっかりと確認できるような意識、ポジション取りを心掛けなくてはならない。

2日間全国大会を経験して、自分の現在地がしっかりと分かった。判定内容だけでなく、見せ方やクルーワークへの取り組みなど全てをもう一度作り直していきたい。非常に内容が濃く刺激的な2日間を経験することができた。
また、様々な方々の支えで活動ができている事を再確認できた。感謝の気持ちを忘れず活動をしていきたい。
最後になりましたが、今回の派遣に際してご協力をいただきありがとうございました。経験を活かし、成長していきたいと思います。

審判員派遣報告書

1	事業名	Softbank ウインターカップ2018 第71回全国高等学校バスケットボール選手権大会	2	日　程	2018年12月23日
3	報告者	仲地祥吾	4	派遣先	武蔵野森総合スポーツプラザ

5	大会概要　および　大会結果		
大会名称	Softbank ウインターカップ2018	大会期間	2018/12/23～28
大会内容	男女50校ずつが出場するトーナメント形式の全国大会。 高校3年生にとっては最後の全国大会でもあり注目度の高い大会である。 今年度は東京体育館の改修工事の為、場所を移して開催された。		

6	担当したGame				
No	期日	対戦カード	R/U	相手審判	ゲ　ー　ム　雑　感
1	12月23日	市立前橋ー安城学園	U1	鈴木氏（東京） 伊佐（東京）	安城学園が終始ゲームをリードし、勝利した。
2					
3					
4					

7　審判会議・その他ミーティング等内容、審判技術・判定基準等に関すること、全体の感想および提言等

○ゲームコントロール

試合序盤に市立前橋のファウルが多かった。選手とコミュニケーションをとり、ファウルを減らす工夫をもっとすべきであった。ベンチからのアピールも多かったので、うまくコミュニケーションをとるべきであったと感じている。コミュニケーションをとりつつも、OWをすべき場面、TFをとる場面を見極めていく力を今後身につけていかなければいけない。

○テンポセッティング

コンタクトの多い試合であったので、序盤にしっかりとテンポセッティングをしなければいけない試合であった。とくにハンドチェックに関しては、プレーの影響の有無に関わらず、早めにコールすべきであった。また、ポストのオフボールのコンタクトに関しては、責任がオフェンスとディフェンスのどちらにあるかを見極めてコールする必要があった。ポストアップしたオフェンスの手については、ディフェンス同様にシリンダーを超えたものに関してはオフェンスファウルをコールするべきであった。

○ガイドライン

高校生の試合は序盤にコンタクトが多く、ファウルも1Qに集中する場合が多い。そのため、審判にとっては試合の入りが重要になる場合が多い。開始直後からガイドライン通りに一貫性を持ってコールを続けていかなければいけなかった。コールしなかったプレーの中に、インパクトが大きかったものもあったので、プレーのフィニッシュまで確認し、影響が出ていればシンプルにファールコールができるようにしなければいけない。

○メカニクス

市立前橋にはビッグマンがおらず、ボールのサイドチェンジが多い試合であった。そのため、リードのローテーションのタイミングが難しく、ノッキングしてしまう場面が何度かあった。こういう試合であっても、迷わずにベーシックなメカニクスを実践することにより、誰がどのプレーを見るべきかということをはっきりさせることが重要である。また、ストロングセンターの重要性を改めて感じさせられる試合であった。特にリードがローテーションを起こしている途中はセンターしか見えないプレーが必ず起きるので、今回のようなローテーションの多い試合ではセンターのシングルコールが多くなる。センターから強く判定することがクルー全体の安定性に繋がるということを実感した試合であった。

○全体を通して

インターハイ、WCをこれまでに何度か経験させていただいたが、今回は良い緊張感で臨むことができたと感じている。大きな試合になればなるほど緊張しすぎて、いつも通りの自分が表現できていなかったが、今回は落ち着いてコートに立つことができた。その分、冷静に試合の振り返りができ、新たな課題を見つけることができた。今後の成長につなげていきたいと考えている。